

### (特別寄稿) 「伊勢物語」源融パトロン説存疑

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2014-09-11
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 片桐, 洋一
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005189

# (特別寄稿)

## 伊勢物語」源融パト u ン 説存 疑

片

桐

洋

され、昭和五十一年七月刊の新潮古典集成「伊勢物語」の解 和四十七年十一月号に「源盤と伊勢物語」と題してまず発表 るのは、 「伊勢物語」の母胎が原触をパトロンとして成立したとす 渡辺実氏の説である。氏の論は「国語と国文学」昭

であろう点については、とり上げる各段の文章解釈と共に、 扱っておられる方方から見れば、奇矯の言説が恐らくは混る 説で広く世間に流布したのであるが、「深く長く伊勢物語を

御批正を賜わるととを願りのみである」(「国語と国文学」)

間

二十数年前に大阪女子大学への就職を熱心に推進してくださ 語」の専門研究者からは賛否いずれの声もない。私自身も、 という謙虚な御発言にもかかわらず、その後十年、「伊勢物 った先輩に対して批判的言辞を述べるのが心苦しく、今まで

> 輪についての数多い疑問の一部をつらねてみることにしたの **節まれそりにもない本誌に寄稿を求められたのを機に、** ことになり、かえって失礼でもあるので、今回、あまり広く 時に「ノー・コメント」というのも、 はひかえていたのであるが、 時折第三者に意見を求められた 間接的ながら無視した 氏の

である。

その集いに、各自が歌の成立譚を持ち寄って披露するのだが、 (融のほか紀有常・在原行平・菜平・源至など)があり、

渡辺氏の論の骨子は、源融をパトロンとする風流歌人の仲

徴するかのごとく、譚の出自を超えて同一主人公の歌物語の それは彼らが風流によって結ばれた一共同体であることを象

**集成の観を呈するに至った。かくして、即業平と脱業平の両** 

面を含んだ歌物語が成立、これすなわち「原伊勢物語」であ

る。

ったということであり(新潮古典集成二一○頁より要約)、

○段・七六段などにもふれながら、論証しようとされるので氏は、これを初段・三九段・八一段・一一四段を中心に、一

あるが、率直に言って、問題は多い。

の、まだ春宮の御息所と申しける時」という文によって始ままず、右にあげた諸段のうち、たとえば、「昔、二条の后

る七六段は、「古今集」の

二条の后の春宮の御息所ときとえける時

(春上・八)

を融の話とすることは出来ないのである。

二条の后、春宮の御息所と申しける時 (物名・四四五)

二条の后の春宮の御息所と申しける時に(秋下・二九三)

ままに受けているととによって明らかなように、「古今集」という諸例に見られる「古今集」詞背通有のパターンをその

ギ山・ハセーの

野にまうで給ひける日よめる

業平朝臣

二条の后のまだ春宮の御息所と申しける時に、大原

平が融のもとで披露した物語であるとは考えられないのであによって物語化した「古今集」以後成立の卒段であって、業

大原や小塩の山も今日とそは神代のことも思ひいづらめ

主人公と二条の后の若き日のラブ・ロマンスを前堤でし加えて言えば、「古今集」の業平歌を物語化したとの段

は、主人公と二条の后の若き日のラブ ロマンスを前提にし 一

のもとで披露し得たとは思われないのである。ており、后を始め清和天皇や陽成天皇の時代に業平自身が殷

「あてなる人」とあるととだけを根拠に、主人公を源啟そ(注1)

てきた主人公の行動を前提にした表現であって、との段だけなほかかることなむやまざりける」は、第一段以降に描かれの人ではないかと推定する一〇段の場合も、「人の国にても、

さて、三九段は、源融の甥で、融を中心とする風流歌人の

天の下の色どのみ」と記されている。しかし、「伊勢物語」

集いに加わることがあったという源至が実名で紹介され、

における「色どのみ」という語は、「心つきて色どのみなる

男」(五八段)とやや戯画的に主人公が描かれている例のほ

かは、二五段・二八段・三七段・四二段など「女」について

がなされているのであるが、この段の至の場合も、崇子内親言われており、しかもいずれもその人に好感を示さぬ掛き方

王のひつぎを見送るために来ていながら、物語の主人公が同

車している女車に「とかくなまめ」いて主人公にたしなめら

たという話であり、「天の下の色どのみ」という表現にも、 それは浅い読み方である。

を得ない街き方になっている。 "なほぞありける」という表現にも語り手のヤユを感じざる パトロンの甥である至の名を出してとのよう 物語の主人公であり語り手で 物 庭園

=

な話を披露するだろうか、

疑問とせざるを得ないのである。

「左のおほいまうちぎみ」として登場する八一段にあった。 渡辺氏の源融パトロン説の根拠の第一は、 ほかならぬ融が

「古今集」哀傷・八五二の貫之の歌の詞書に「河原の左の

りけるに、 る」とあるのを見ても、 おほいまうちぎみのみまかりてののち、 しほがまといふ所のさまを作れりけるを見てよめ 触の河原院が陸奥の塩釜の景を模し かの家にまかりてあ

庭園を作ったのが高名な作庭師であっても、 て作られたものであることは疑えない。 じっさい、 融の注文や同意 河原院 Ø

に見立てたという書き方は事実に反するという渡辺氏の見方 いて主人公の「かたゐおきな」 が初めてこの庭を塩釜 「伊勢物語」八一段に 亜の浦

は成り立たぬわけではない。

しかし、

物語の読み方としては、

たかと感じ入る鸷き方になっているのである。

ぉ

によって作られたものであろうから、

[が本来「海」を模したものであることは、

ح 0

は問題ではない。 いうところに物語の眼目があると読めば、 どもりがた」の集いに来会した数多くの人人の中で最も身分 せた融の意図を、 ってわかるが、 の低かった「かたね翁」だけが、これを見事に見抜き得たと |語||七八段においても、 作庭師をして陸奥塩釜の景をあえてかたどら との院の初披露かと思われる「神無月のつ 「塩釜に」の歌の前に「あけもて行さかり 庭を「島」と呼んでいることによ 事実に反すか否か

たり。 釜の浦を模したものであることを先に語って 方が、豹の歌の名誉を語るためにはふさわしいのであって、 絵巻」模本)などという注釈的な説明を持たぬ現存諸伝本の に、此殿の面白を上中下歌によむ。 そとにありけるかたるおきな……」(「異本伊勢物語 塩がまのかたをつくられ \$ かなければ 塩

て有名な歌枕「塩釜の浦」は、 のつなでかなしも」(古今集・東歌・一〇八八) なるほどこのような所であっ などによっ

を聞いた人人が「みちのくはいづくはあれど塩釜の浦とぐ舟

融と業平が重なってしまり」ということは全くない。

翁の歌

3

八一段とともに、渡辺説の大きな原動力になっているのは

氏は、「古今集」に駛の作となっている「みちのくのしの

初段である

の理由とされたのであるが、率直に言って、これも説得力が 違いない」と見、融を「伊勢物語」のパトロンに擬する第二 れ、「菜平または仲間の誰かが、啟を意識して記したものに ぶもぢずり」の歌がこの初段に引かれていることを不審とさ

関係の深さは否定できないのである。

○段・四一段あたりと深いかかわりを持っていることは注意 の外伝として誕生する契機となった重要な章段であるが、四 「伊勢物語」が、業平一代の物語、つまり業平

すべきであろう。

き男のまづしき、一人はあてなる男もたりけり」と語る四一 いりことは、「昔、女はらから二人ありけり。一人はいやし ら」が、何故「女はらから」でなければならなかったのかと まず、初段の「春日の里」の「いとなまめいたる女はらか

段の延展と見るととによって初めて理解されるが、初段の「

あたかもかの夢幻能のどとく、融も行平も有常も今は世を去

**ぢずり」の歌の「心ばへ」であるのと同じように、四一段の** 春日野の若紫の」の歌が「古今集」の「みちのくのしのぶも 「むらさきの色とき時は」の歌が「古今集」雑上(八六七)

見る」の「心なるべし」といり形をとっていること、さらに ある歌になっていることに注意しなければならない。 は初段・四一段ともに「衣」に緑があり「むらさき」に緑が の「むらさきの一もと故に武蔵野の草はみながらあはれとぞ 両者の

みやびをなむしける」の「むかし」と同次元であることは言 りをまたないが、そのような「昔」のある日、「りひかりぶ 「むかし」が、その末尾文の「むかし人は、かくいちはやき 次に「むかし、男、うひかうぶりして」という初段冒頭の

は思はざりしを」(一二五段)とよんで絶命した業平自身が、 ように、「つひにゆく道とはかねて阳きしかどきのふ今日と(まつ) むや」と記されている行動と、まさしく同次元のものだと言 り」した若い男がとった行動は、四○段末尾に「むかしの若 ってよい。「伊勢物語」の「むかし」は、母近別に詳述した 人は、さるすける物思ひをなむしける。今の紡、まさにしな

ずからの体験を「昔」という形で語り出すような投薄な方法 二段)という羌漢たる時空の中に彭晦とともに語っていると 時よへて久しくなりにければ、その人の名忘れにけり」(八 みやび」や「すける物思ひ」をなし得た「昔」の世界を、「 いうタテマエでまとめられているのであって、つい最近のみ って誰もいなくなったとの世に再び蘇生して、「いちはやき は、

### 五

ではないのである。

渡辺説に対する決定的な疑問を開陳しておこう。 以上述べて来たことの「まとめ」を兼ねて、このあたりで、

書を持つ歌がある。 勢物語」の文章をそのままに収録したとしか考えられない詞 すでに何度も述べたことであるが、 「古今集」には、 一伊

歌として恋三・六三三に採られている。 れているし、 古今集」恋五・七四七に「在原業平朝臣」の歌として採ら 五段もほとんど変らない詞掛で「業平朝臣」の 「伊勢物語」 四段はほとんどそのままの詞書で その他、 九段の「か

らどろもきつつ」の歌(古今・四一○・業平)「名にしおは

有常) 渡辺氏の言う融グループの歌はない。「古今集」以前の「伊 な例であるが、業平との贈答歌である有常の**一首を除い** ば」の歌(古今・四一一・業平)、八二段の「かりくらし」 たということになるのでは 行平や有常がみずから語ったはずの章段は含まれていなかっ 勢物語」は、やはり菜平の歌が中心となっていて、 (古今・四一八・菜平)「ひととせに」(古今・四一九・紀 「古今集」が「伊勢物語」に依拠していることが明らか 八三段の「忘れては」(古今・九三〇・業平)など いか。 融や至や て、

や小塩の山も」の歌のように「伊勢物語」 けたかと思うが、なお念のために、 以上で私の言おうとしていることは十分に理解していただ 前述した七六段の「大原 が 「古今集」から

な

首を除けば、 られた八二段の有常の歌一首と初段に引かれた例の融の歌 三十首にのぼる。 まで範囲を広げて両者の重出歌を数えると、 採った歌や、「古今」「伊勢」いずれが先か判断しかねる歌 渡辺氏の言う「伊勢物語」作者グル しかるに、 業平との贈答歌であるゆえに採 業平の歌は実に ープの歌は

融の作ではなか

くなる」という歌を、全く根拠もないのに、

全くない。

前述したように、一〇段の「わがかたに寄ると鳴

ったかと言われるのは、 現存の「伊勢物語」の中に融をとり

まく風流人たちの歌がまだまだ含まれているはずだという思

い入れが渡辺氏にあるからであろう。にもかかわらず、 一古

勢物語」から業平の歌だけを採り、他の作者たち、たとえば 今集」の授者が (「後援集」を含めて言ってもよいが) 一伊

十世紀後半の成立と考えられる「在中将集」や「雅平

・行平・有常・至などの歌を採らなかったのは何故であろ

敨

別し得たのではないかと言われる渡辺氏が、薬平死後二十五 本業平集」の度者でさえ「伊勢物語」の歌を業平作か否か弁 行平死後十二年、啟死後十年、しかも二条の后も、 かの

「古今集」が「伊勢物語」の中の業平歌だけを弁別して、融

伊勢の斎宮であった人も未だ生存していた時代に編集された

や行平の歌が

「伊勢物語」の中にあるのを、

全く見逃してし

るものであった。 まったと考えられるのであろうか。 期の「伊勢物語」は、まさしく在原業平その人の手にな 「在五が物語」と呼ばれながらも「伊

ず

からに納得されてくるのである

将が作った「伊勢物語」ということであったと、ここにおの

語」と呼ばれ得たのも、

在五が「伊勢物語」、つまり在五中

ある。

勢物

六

源融をパトロンとする歌人グループが「伊勢物語」

の作者

見方を含んでいることを私は看過することができな のであるが、にもかかわらず、この渡辺説が非常に興味深い たちであったという仮説はこのように成り立ち得ないものな

というのは、 「菜平集」が発展して「伊勢物語」になっ た

とする「私家集→物語的私家集→歌物語」という他田亀鑑

斻

通するものがあるばかりか、 研究篇」の第一篇歌物語の発生と展開などに述べ の見方を完全に否定している点において「伊勢物語の研究 「伊勢物語」を風流歌人の集い た私見と共

巧みに換骨奪胎した菜平が友人たちに披露したものと見る私 語が唐から将来したばかりの元禄作「会真記(寫寫伝) の中で語られたものと見るのも、たとえば六九段の斎宮の物 しを

一七一頁参照)と共通している点が、はなはだ多いからで の考え(鑑賞日本古典文学4「伊勢物語・大和物語」一六二

官物語や四段・五段の二条の后物語は薬平創作のフィクショ ただし、 第一次「伊勢」の中の、 たとえばこの六九段の斎

おり、またそのような歌語りは、源融の周辺だけに限らず、ると見る私見は、すべてを体験談と見る渡辺説とは相違してンであり、一方八二-八四段などは業平の体験の物語化であ(キョッ)

(笠間旮院、昭和五十七年刊)所収の拙稿「伊勢物語(注2)南波浩先生古稀記念論文集「王朝物語とその周辺」

に見る語り手の変化」をぜひ参照されたい。

「古今集」が在原業平朝臣の歌としているのは、その(注3)フィクションである四段・五段・六九段などの歌を

式部の歌として入集させるのと同じである。だからである。後代の勅撰集が「源氏物語」の歌を紫フィクションとフィクションの核になる歌が菜平の作

推論ー」(「国語と国文学」昭和五十三年六月号)は(注4)吉山裕樹「原型伊勢物語考-その成立をめぐっての

二条の后のサロンで「伊勢物語」の一部が作られたと

が業平の作とする「むらさきの色こき時は」の歌をああてなる男もたりけり」という書き出しで「古今集」を日は、四一段にも「一人はいやしき男のまづしき、一人は

げる。薬平も場面によっては、相対的に「あてなる」

と言われてよいのである。

思うのである。

が、一致している点も、またそれ以上に重要な問題であると

する。

いる点は「伊勢物語」の本質を考える上に重要な問題であるいる私見は、渡辺説と異なっている。そして、この異なって

二九四)二条の后のサロンにおいて語られてもよいと考えて書)などの有力歌人が集まり、業平自身も加わった(古今集

八八段)に語られてもよいし、文屋麻秀(古今集八・四四五てもよいし、「いと若きにはあらぬ」友だちが集まった時(惟喬親王と「酒のみ物語し」た時(八二・八三段)に語られ

詞書)や素性法師(同二九三詞書)や藤原敏行(後撰集一詞